

みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL.22 No.2

(通巻75号)

平成7年9月10日発行

編集・発行人 森 成吉

〒260

千葉市中央区中央港1丁目10番1号

☎043-242-8311(代表)



きぬ あさじ さくら かえでち はな まる も よう ドウジン
「絹・浅地桜楓散らしに花の丸模様胴衣」

(沖縄県立博物館蔵)

縮緬地に型紙を用いて染められたもので、桜、菖蒲、牡丹、楓、菊、梅などの四季の花々が模様として散りばめられています。異なる季節が盛り込まれた自由な文様は、四季の変化に乏しい沖縄に住む人々の季節への憧れが表現されています。また、これらの植物の中には、沖縄には生息しないものもあり、型紙が本土から渡来したのではないかとも思われます。

「紅型」は、沖縄で育った独特の模様染めで、米糊を防染に用い、顔料と植物染料を併用したものです。技法としては型染と筒描きとがあり、その名称の由来や技法の伝来の起源は明らかではありませんが十八世紀には定着していたと考えられています。柳宗悦は「紅型」を称し、「型染」としては紅型ほど純粋なものではなく、又恐らくそれより美しい染ものを着た風俗は世界でも類例の稀なものであらう」と述べています。

紅型の着用は、もっぱら王族や士族などの上流階級の人々と舞台衣裳としてのみ許されていました。

(前川公秀)

特別展

沖繩の工芸美術

'95・9・9(土)〜10・8(日)



「黒漆雲双龍螺鈿椀」

かつての琉球王国である沖繩は、四方を海に囲まれた地理的特性をいかして、交易や進貢貿易を通じて、中国、日本本土そして東南アジア諸国など各国から積極的に技術を導入してきました。これらの技術は、やがて沖繩の気候風土に培われた独自の芸術文化へと発展していきます。

とりわけ17世紀以降、工芸美術がめざましい発展を遂げ高度に洗練された優れた作品が次々と現れるようになります。

このような沖繩文化を柳宗悦は「ひとつの小さな島で、千年の独自の文化史を有つものがどこにあろうか、沖繩は狭いがゆえにあらゆる文化がここに圧縮され、煮つめられ結晶されたのだ」と評しています。

洗練された王朝美術としての「漆器」と「紅型」

王朝美術の代表のひとつとして、まず漆器があげられます。琉球漆器は18世紀頃に隆盛期を迎え、多様な文様・形体の漆器が制作されるようになります。なかでも、貝殻を使う螺鈿(らでん)の技法は沖繩の海に豊富に産した夜光貝を背景に著しく発達しました。曲面に薄い貝片を貼りつけた「黒漆雲双龍螺鈿椀」は琉球漆器の技術の高さを示しています。また、漆に顔料を混ぜて練った餅状のものを貼る堆錦(ついきん)は高温多湿な自然条件が必要なため沖繩の風土に適した技法として知られています。「黒漆蓄薇堆錦軸盆」は堆錦の層が厚く、作りもしっかりしているという点で堆錦技法初期の特徴がみられる作品です。

代表する染物として紅型があります。

当時、中国や沖繩では黄色地の衣裳は王族のみが着用するものとされてきました。その黄色の染色には沖繩に自生する福木が用いられました。「黄色地震に枝垂桜と流水に蛇籠桜葵菖蒲小鳥模様袷衣裳」はその好例です。また、同作品を同じ型紙で藍一色と墨で染めた藍型(イエーガタ)とよばれる作品もあり、表現の違いを比較することも興味深いことです。

生活の中から生まれた素朴な「陶器」と「織物」

人々の生活から生まれたものとして「陶器」があります。沖繩の陶芸は素朴なおおらかさと独特の形に特徴があります。例えば携帯酒器ともいえる抱瓶(ダチビン)、シーサーとよばれる屋根獅子、沖繩の骨壺である厨子甕(シーシガー

ミ)などです。シーサーは魔除けとして陶器や漆喰で作られたもので、屋根の上などに置かれました。ユニークな獅子の動態などさまざま、その表情などが作者の腕の見せどころであったようです。

厨子甕は古くは木製もありましたが、のち石製と陶器により作られるようになります。形は壺型と御殿型(家型)があり保存や美観のうえから素焼きの焼締めから施釉へと変化していきました。御殿型にみられるシャチホコや獅子、龍などの特徴的な装飾は死者の永遠のすみかであり夢の実現であるといわれ、信仰深い



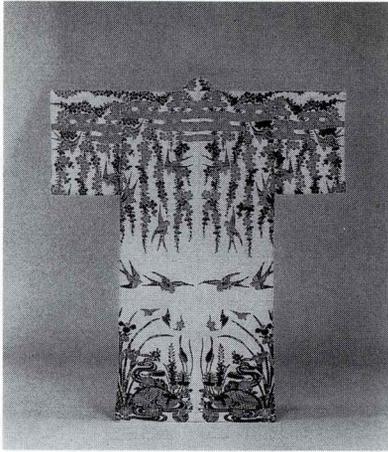
「朱漆山水楼閣人物堆錦丸型東道盆」

沖縄の人々の生活を象徴しています。

なかでも、特筆すべきは、織物と言わねばなりません。沖縄は日本の織りのふるさとといわれ、各地域にそれぞれ特徴のある多くの織物が残っています。その技法・種類は他の地域に類例がないほど豊富です。

緋・紺などの織り技法から多様な模様が生まれています。柄には、縞・格子縞などがあります。また縞と緋を組み合わせた綾中（アヤナカ）・格子縞と緋を組み合わせた手縞（テジマ）などがあり、沖縄織物独自の美しさを見せています。

さらに沖縄独特の生地である芭蕉布・桐板（トンビヤン）



「絹・黄色地震に枝垂桜と流水に蛇籠桜菱莖蒲小鳥模様袷衣裳」



「壺屋焼 上焼ツノ型厨子甕」

中国から輸入した麻状の糸で織った、透けて張りのある織物）苧麻（チヨマイイラクサ科の植物繊維で、そのさらりとした感触は暑い沖縄には最適な衣料）など、生地と織りとの組み合わせによって多様なバリエーションが生み出さ

れてきました。展覧会について

本展覧会は沖縄県立博物館所蔵品を中心にした、およそ一八世紀から一九世紀時代の作品、約一〇〇点を「漆器」「陶器」「紅型」「織物」の四つの分野によって展示します。これまで鑑賞する機会が少なかった沖縄の工芸美術が東洋工芸史のなかで重要な地位を占めるものとして高く評価される由縁をご理解いただけるでしょう。また、本展



「麻・白地八重山上布スディナ」

では同じ黒潮流域にある沖縄と房総文化との関連を考えるため、紅型と同じ型染めで染められている、房総の万祝（まいわい）をあわせて展示します。

（高橋 正夫）

会期 九月九日（土）

一〇月八日（日）

月曜日休館

開館時間 午前九時

午後四時半

入場料

一般

七〇〇円（四〇〇円）

・高・大学生

四〇〇円（二五〇円）

・小・中学生

二〇〇円（七〇円）

（ ）内は二〇名以上の団体的料金

美術講演会

平成七年度美術講演会は、各展覧会に併せ、四回実施する予定です。

二回目は特別展「沖縄の工芸美術」に関連し、左記のとおり実施します。

日時 九月三十日（土）

午後二時より

演題 「紅型―風土の生みだした美―」

講師 長崎 巖氏

（東京国立博物館染織室長）

会場 千葉県立美術館講堂

対象 二〇〇名（当日先着順）

長崎氏は、東京芸術大学大学院の博士課程を修了。美術史学会、日本民俗史学会、服飾美術学会等に所属。特に江戸小袖染織の技法・文様に関する調査・研究に優れ、また、『緋』などの著書や、「初期へ友禪染」に関する「一考察」などの論文を、多数発表されています。

今回の講演会では、沖縄の工芸美術のうち、染織工芸である紅型を中心に、幅広く染織文化についてお話ししていきます。

房総の美術家シリーズ(24)

高澤南総展

11・11(土)〜12・17(日)

房総の美術家シリーズは、房総に生まれ、あるいは定住して、近代日本美術界において活躍し、美術振興のために貢献した美術家たちの再発見と顕彰を目指し、行つてまいりました。

今回は、本県書道界において活躍した書家・高澤南総をとりあげ開催いたします。

高澤南総(本名武雄)は、明治四十四年(一九一一)に袖ヶ浦市に生まれ、千葉師範学校(現・千葉大学)に進学しました。在学中の大部分を剣道の練習に没頭していた南総は、たまたま手にした習字書と、奇しくもその年赴任した浅見喜舟と出会い、それが書に一生を捧げる契機となりました。浅見喜舟に師事し、肉筆手本によって、楷・行・草書の基礎を学び、その後、田代秋鶴に師事し、着実に独自の書風を確立していくことになりました。

卒業後、文検に合格し、佐倉尋常高等小学校訓導を振り出しに、中学校、高等女学校

の教員を経て、昭和二十年から千葉師範学校、続いて千葉大学で教鞭をとり、六十五歳で千葉大学教授を退官するまでの四十六年間に教職に捧げると共に、教育書道に大きく貢献しました。

また、書家としては、昭和七年、第三回泰東書道院展に入選したのを皮切りに、日本書道美術院展、無心会書展、毎日書道展、千葉県書道協会展等を中心に出品を重ね、昭和五十一年、第三十回日本書道美術院展に出品の「一道飛泉萬松裡」でオリベッティ国際賞を受賞しました。

後年、日本書道美術院理事、無心会会長、毎日書道展参事、全日本書芸文化院代表、千葉県書道協会会長、千葉県美術会常任理事などをつとめ、房

総の書道界の中心として活躍しました。

高澤南総の書は、穏やかで、かざりのない中に、おもおもしさと品格を湛え、剣法のさばきにも似た緊張感に溢れ、余白の清潔な美しさがひとときわ印象的です。

昭和二十年頃から、伊都内親王願文のリズムある運筆法にひかれ、臨書・做書し、創作への発展を期し、墨色に流されることを排し、淡墨の使用を一旦中止した時期もありました。大病後、副島蒼海や宮島詠士の書に私淑し、自らの書境を高めたのが昭和四十年頃のことです。喜寿を迎え、更に新たな目標を見出すべく、大字揮毫に全精力を傾けました。各時期の作品は魅力に溢れ、見る人の心を引きつけてやみません。

本展覧会は、高澤南総の作品約六十点、その他関係資料を一室に展覧し、その芸術を広く県民に紹介するものです。

常設収蔵作品展

●平成七年十一月二十五日から十二月二十四日まで「浜口陽三の版画」を開催します。

浜口陽三は、明治四十二年(一九〇九)和歌山県に生まれ、東京美術学校に学びました。カラー・メゾチントという独自の技法で、柔らかな深みのある黒を背景とした微妙な色彩の移り変わりを表現しました。サンパウロ・ビエンナーレ展国際版画部で日本人として初めて大賞を受賞し、現在も世界的な版画家として活動を続ける浜口陽三の銅版画を紹介いたします。

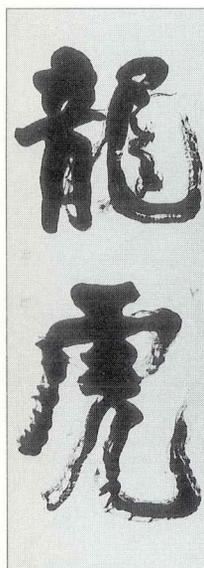
●十一月二十五日から平成八年一月二十一日までは「石橋武治の風景画」を開催します。石橋武治は、明治二十三年(一八九〇)茨城県に生まれ、光風会展や帝展(後の日展)で活躍しました。特に本県では、美術会の結成や、県内の美術振興に多大な功績を残し、県教育功労者、県文化功労者として表彰されています。

安定感と広がりのある空間を表現した石橋武治の水郷の風景画を中心に紹介します。

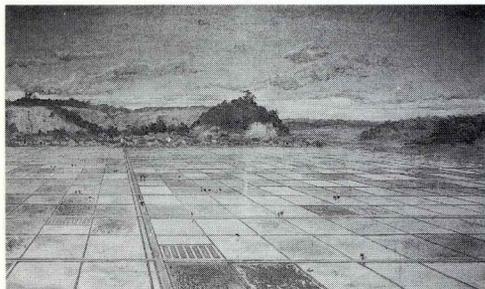
●一月五日から二月二十五日まで「鶴田吾郎の世界」を開催します。鶴田吾郎は、明治二十三年(一八九〇)東京都に生まれ、倉田白羊、のち中村不折に師事し、帝展、新文展、日展で活躍しました。

戦争記録画や、国立公園を描き、日本山林美術協会などを創立して、山岳絵画の普及にもつとめました。

また、同じ会期で「絵画に表現された風俗」を開催します。時代や地域によって様々な特徴を持つ人々の身なりや生活、あるいは、生活の中で伝えられた儀式や風習などを



高澤南総「龍虎」



堀江 正章「耕地整理図」

『時代の風俗』『地域の風俗』『風習・儀式』の三つのテーマにより紹介します。

●一月二十七日から二月二十五日までは「堀江正章と旧制千葉中学の弟子たち」を開催します。

堀江正章は、安政五年（一八五八）に長野県に生まれ、旧制千葉中学校の図画囑託教師として三十五年間教鞭をとり続けました。明るい色彩の画面から「コバルト先生」と呼ばれた堀江の作品と、彼の教えを受けた石井林響、柳敬助、板倉鼎などの作品を紹介します。

●一月五日から四月十四日まで彫刻作品を展示します。
木やブロンズ、鉄などの素材を様々な技法によって表現した作品や、様々なモチーフによって表現された作品などを紹介します。

●三月二日から三月二十四日までは恒例の「浅井忠」を開催します。千葉県ゆかりの画家で、近代日本洋画の先駆者として活躍した浅井忠の作品や資料などにより浅井の生涯と業績を紹介します。

新収蔵作品紹介

平成七年四月一日から九月一日までに収蔵された作品を紹介いたします。

購入

- 〔日本画〕
石井林響
「白閑鳥」(紙本着彩/二五四~二五)
- 〔洋画〕
椿貞雄
「垣根のある風景」
(キャンバス・油彩/一九九)
- 「牡丹」(キャンバス・油彩/一九〇)
- 「夏之路傍」
(キャンバス・油彩/一九三)
- 〔工芸〕
香取正彦
「臙銀花瓶」(鍍金/制作年不詳)
- 「花器」(鍍金/制作年不詳)
- 青木滋芳
「寂」
(染色/一九〇)

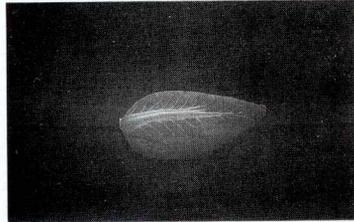


椿 貞雄「牡丹」

- 山室和子氏より
伊原宇三郎
「曇り日の丘」
(キャンバス・油彩/制作年不詳)
- 岡田三郎助
「デッサン(裸婦)」
(紙コラ/制作年不詳)
- 〔工芸〕
山室和子氏より

〔版画〕
浜口陽三

- 「レタ」(紙・銅版/一九五)
- 「白菜」(紙・銅版/一九〇)



浜口陽三「白菜」

寄附

- 香取秀真
「瑞鳥飾三足鑑」
(鍍金/制作年不詳)
- 「盃」(鍍金/制作年不詳)
- 香取正彦
「末広花入」
(鍍金/制作年不詳)
- 「卓鈴」(鍍金/一九二頃)
- 高村豊周
「香炉」(鍍金/制作年不詳)
- 津田信夫
「鹿」(鍍金/制作年不詳)
- 「水牛」(鍍金/制作年不詳)
- 「兎」(陶芸/一九三)
- 「竜」(陶芸/一九三)
- 根箭忠緑
「牛」(鍍金/制作年不詳)
- 富取町子氏より
土肥刀泉
「銅彩牡丹文扁壺」
(陶芸/制作年不詳)
- 〔書〕
山室和子氏より
津田信夫
「壺中乾坤」(紙・墨/一九四)
- 「木人不近獅子吼」
(紙・墨/一九六)
- 「相識満天下知心触幾人」
(紙・墨/一九〇)
- 豊道春海
「艸書禪語」(紙・墨/一九五)
- 大野尊氏より
大野虚舟
「阿吽」(紙・墨/一九五)

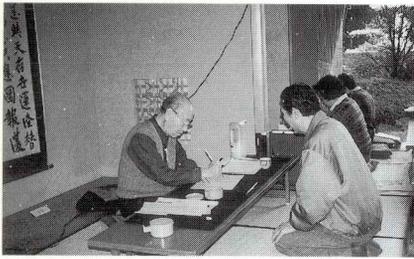


大野虚舟「天靈地氣一騰」



津田信夫「鹿」

- 「子供の情景」
記号探しのパズル」
(紙・墨/一九五)
- 「天靈地氣一騰」
(紙・墨/一九二)
- 渡辺春園氏より
石井雙石
「久遠寺印」
(篆刻・朱文・石印/一九五)
- 〔その他〕
山室和子氏より
山室百世関係図書ほか
渡辺春園氏より
「石井雙石使用印床」
岩溪文字氏より
篆刻研究誌「雕蟲」、写真アルバムほか石井雙石関係資料



書芸講座

◆彫刻講座
 会期 10月17・18・19・20・21・24・25・26・28・29・31・11月1日(12日間)
 講師 石橋 亘氏
 内容 石彫
 定員 15名
 締切 10月3日(火)
 ◆書芸講座
 会期 11月7・8・9日(3日間)
 講師 中村象閣氏
 内容 漢字、かな
 定員 25名
 締切 10月24日(火)

実技講座の御案内



金工講座

◆金工講座
 会期 1月23・24・26・27・28・30・31・2月1・3・4・5・6日(12日間)
 講師 小林正利氏
 内容 銅版レリーフ
 定員 15名
 締切 1月9日(火)

《申込方法》
 往復ハガキに希望講座名、住所、氏名、電話番号を明記のうえ、(ハガキ一枚につき一名)美術館普及課までお申し込みください。
 なお、定員を越えた場合には抽選となりますので御了承ください。

教養講座とヨーロッパの旅

(財)千葉県社会教育施設管理財団、千葉県立美術館、千葉県教育委員会主催による本事業は、「浅井忠の足跡と近代絵画の流れ」のテーマにより、浅井忠のヨーロッパ留学時代を中心に、バルビゾン派の絵画をはじめ、ヨーロッパ絵画史の理解を深める機会としました。本館職員の他、実践女子大学教授の島田紀夫氏を招き、幅広い内容で全四講座を実施しました。
 また、講座参加者を対象に、ヨーロッパの旅(イタリア・フランス)を十一月に予定し、只今準備を進めています。



情報資料室だより

特別展「沖繩の工芸美術」の開催に際し、情報資料室にある関連図書を紹介いたします。どうぞ御利用ください。

- ― 図書 ―
- 「近代日本の漆芸」「日本の漆芸全6巻」「琉球紅型」「万祝」「日本の文様10」「18巻」
- 「文様の事典」「近代装飾事典」「日本文様事典」「染織の文化」
- 「日本の工芸1巻 2巻 7巻」と染」「文様1、2巻 暮らしの美と心」「芹沢銈介作品集全5巻、別巻」「原色染色大辞典」「沖繩の民藝」他
- ― 図録 ―
- 「琉球漆器展」「近代日本の漆芸」「琉球王朝秘蔵紅型」「琉球紅型の美展」「現代の型染」「インド・東南アジアの染色」「尚家継承琉球王朝文化遺産」「染のかたがみ」「世界の染めと織り」「型絵染の巨匠芹沢銈介展」「アンデスの染織と工芸」「沖繩の美」他
- ― 雑誌 ―
- 「日本の美術 No.127紅型」「月刊染織 α No.26」他

開室日
 火・金(祝日・休館日を除く)
 12時30分～4時30分
 閲覧のみ(貸出し、コピーサービスは行っていません)

〈交通案内〉

- JR総武線「千葉駅」より「千葉ポートタワー」バス15分「美術館・郵便局前」下車 徒歩1分
- JR京葉線「千葉みなと」駅下車 徒歩8分
- 千葉都市モノレール「千葉みなと」駅下車 徒歩8分

